

アフリカと踊ろう!

2021年2月 NO.100

100号記念 企画座談会 アフリカチームの歩み その1

中村：本日は、アフリカチームの機関紙である「アフリカと踊ろう」が創刊号から通算100号を数えるという事で、それを記念してアフリカチームの歴史を語っていただく座談会を設けさせていただきました。最初に参加者の自己紹介をしていただければと思うのですが、今井さんからお願い出来ますか。

今井：皆さんこんばんは。今井高樹と申します。アフリカチームは1999年から2005年の頭ぐらいまで活動していました。現在はJVCの代表理事をしております。よろしくをお願いします。

石川：私、何年から入ったのか忘れちゃったんですけど…92年ぐらいにJVCに行き始めて、昼間のボランティアをやってスタッフになり、2019年の3月にJVC卒業して、今は保育士の2年目をやっております。石川朋子です。よろしくをお願いします。

中川：今、ざっくり計算したら、98年か99年ぐらい、大学4年生の時にJVCに来て、その後、建設系のコンサルタントに入って、その会社が潰れそうになって、今、開発コンサルタントで働いて10年ちょっとになります。宜しくお願いします。

栗田：栗田貴之です。自分は確か、1993年からアフリカ…というか、その当時はエチオピアチームでしたけど、来ておりまして。その後、多分96年

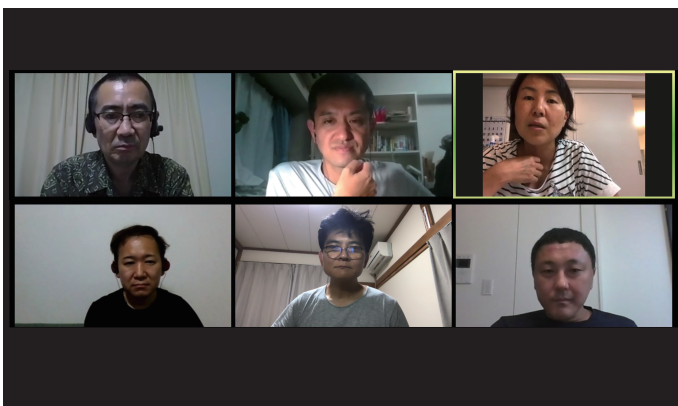
ぐらいに青年海外協力隊に行ったんで、そこから2年間空白があって、その2年後また復帰して、それから出たり入ったり出たり入ったりで今に至っております。中川君と同じ開発コンサルタントの仕事をしています。

小河原：小河原といいます。JVCに来たのは92年のラオスチームで、95年辺りでアフリカチームに入りました。で2002年ぐらいの時にJVCが主催するスタディツアーで南アフリカに行きました。現在はフリーのデザイナーをやっております。よろしくをお願いします。

中村：ありがとうございます。こんな5人のメンバーでお話をさせていただこうと思うんですが、誰にこの座談会に参加してもらおうかというメンバーを決めるに当たって、アフリカチームはざっくり30年ぐらいやってると思うんですけど、2000年代に主に活動していたというメンバーが捕まらなくて、どちらかというと90年代からのアフリカチームの黎明期ですかね。その頃から活動されている方々に、その時代どんなことがあったのか、或いは今の2020年と比べて、今に繋がってる部分もあれば、「昔、そんなことあったんだ?」ということもあるかと思うので90年代のを中心に伺っていただければと思うんですがアフリカチームに参加したきっかけ

を今井さんから教えていただけますでしょうか。

今井：分かりました。私は99年から参加したんですが、その当時、東京で会社員をやってまして…きっかけは学生時代の友達がカンボジアで一人でNGOをやっていて、それにすごい触発されたということがあって、彼の報告会に行ったら、JVCカンボジアのボランティアメンバーとかスタッフが来ていて話をしたというのがきっかけですね。私はアフリカチームに入った時にカンボジアチームの人から「裏切り者」と言われたんですが（笑）。何でアフリカチームだったのかというと、カンボジアでNGOをやった友達がこう言ったんですよ。「やっぱり国際協力とかやるんだったら、アフリカでやらなきゃダメだ」と。「自分はカンボジアで始めたけど、その後アフリカでやるんだ」とも言っていて、結果的にはそうはならなかったんですけども、そういうこともあって、「やっぱりこういうことをやるんだったら、アフリカなのかな」って思ったというのが一つです。アフリカに対する関心っていうのは、高校生の頃から、アフリカのディアフォア戦争とか色々本を読んだりしていたっていうのはあるんですけど、直接的には友人とのことがあって、アフリカに実際行ってみたいと思って、アフリカチームに入るちょっと前に、一人でアフリカに行ったんですよ。一週間会社の休みをとって。その時は今と違ってアフリカに行く飛行機が毎日便がなくて、とにかく入れる場所に行こうって事で、南アフリカは当時もシンガポール航空とかが毎日飛んでいたんですよ。それで南アフリカ経由で行けるジンバブエに行ったんですよ。その時に一番印象に残ったのがジンバブエから帰る時、南アフリカに寄って、ジョハネスバーグでソウェトとかに行ったんですけど、そっちの方がすごい印象に残って。タウンシップ・ソウェトの様子と、一方でジョハネスバーグの大邸宅とか近代的な所とかいうのが…。それでJVCが南アで活動しているっていうのは知ってたので、ちょっとボランティアチームで関わってみようかなと思ってJVC



▲ オンライン座談会の様子

上段左から、今井・栗田・石川 下段左から、中村・小河原・中川

に来た…そういうきっかけで参加をしました。で、参加した日のことは、中身は全然覚えてないんですけども、よく覚えてるのは、石川さんが、ミーティング終わって、最後に皆で別れ際に、当時、丸幸ビルの下のローソンの前で「今井さん、このあとも、次回も来てください」と言われたのが、唯一というかすごく印象に残ってるんですが（笑）、それが参加のきっかけです。

中村：ありがとうございます。ではその今井さんの心を見事JVCに繋ぎ止めた石川さんのアフリカチームに入ったきっかけを教えてくださいませんか。

石川：私が入ったのは、そんな高尚な話じゃなくて、もともとJVCの昼間のボランティア、それこそTEの発送の時期にラベルシールを貼ったりとか、そういう発送作業に来ていた時に、ボランティアやりたいんだったら、夜にボランティアチーム（のMtg）があるよって言われて、声かけられた日がたまたまアフリカだった。私自身はアフリカというよりアジアに関心があって、自分の人生の中でアジアに行くことはあってもアフリカに行くことは絶対にないだろうと思って、ボランティアチームも、もっと身近な距離的にも近い国がいいなと思っていたんですが、入ってきた日に、それこそ今井さんじゃないけど、小河原君とか栗田君とか、獅子さんという人がいて、なんか

入った日から1メンバーとして仲間に入れてもらって、丁度それこそ合宿の話をしていて、私なんかまだまだ入ったばかりだから、いつでもいいやと思っていたら、「で、朋ちゃんはいつが都合いい？」みたいに、すごい入ったばかりなのに、自分も1意見として聞いてくれたというのがあって。きっかけはそういうたまたまというのが一番大きいです。

中村：でも、たまたまが今につながっていて、運命って面白いですよ。その今の流れで、今井さんの心をアフリカチームにつなぎ止めたのが石川さんで、石川さんの心をつなぎ止めたのが栗田さんと小河原さんと、獅子さん、そういう話だったんですけど、じゃ、その栗田さん、どういう感じでアフリカチームに関わるようになりましたか？

栗田：僕はそもそも国際協力に全く関心がなかったんですけど。ちょっと話は逸れるんですけど、その当時ペルーで、アルベルト・フジモリさんという人が大統領になったんですね。日系人なんですけど。それで、なんでそういう遠い所で、日系人の人が大統領になりたいと思ったんだろうというのが一番最初です。国際協力に関心を持った最初で、その当時インターネットとかなかったんで、国際協力の情報を集めに、いろんなNGOにコンタクトをとったら、合同説明会みたいなのをやるっていう話を聞いて、実際会場に行ったら、いろんなNGOがあるんですよ。それで、日本国際ボランティアセンターって一番とっつきやすい名前じゃないですか、それで、そのブースに行って、「すいません、僕南米のことに関心があるんですけど」と言ったら、「南米はやっていないよ、あなたアフリカやりなさいよ」って、その当時エチオピアチームにいた方から本当、強引に声かけられて、火曜日待ってるからねって言われて、いや僕南米やりたいんですけど、行って、いや火曜日待ってるからって言われて、行ったのが一番最初です。そこからは、その当時いたメンバーの方々がすごいアフリカの、今

でもスペシャリストでやってる方ばかりなんですけども、この人たちすごいなという、いろいろ勉強させてもらう時があって、それからずっとアフリカとか申し訳ないんですけど全然関心がなかったんですが、どんどん関心が高まってって、未だにやってるという所です。

中村：ありがとうございます。やっぱり人との出会いって、一つきっかけになりますよね。関心を持って、そこで出会った人が何かしら自分の心にくさびを打ち込むというか、面白いですよ。同時期にやっぱりアフリカチームに入られた小河原さんは、先ほどラオスチームからという話をされましたけど、そのへんの流れを具体的に教えてもらえますか？

小河原：僕はまず色んなNGO団体に声をかけて実際に行ってみたりして、JVCのオリエンテーションにも参加しました。東南アジアに興味があったのは僕の祖父が戦争で亡くなったっていうので調べてたんですけど、ちょうどJVC主催のラオスタディーツアーがあるから参加したんですけど、そこでもう心を奪われたというか衝撃を受けてしまって、そこからラオスチームに入ったのがきっかけです。アフリカにも興味があって、僕の世代に多いんですけど、84年から85年にかけてのエチオピア大飢饉があり、あのショッキングな映像が心の中に残っていて、そこからNGO活動やりたいという人が多かったんですよ。僕もその一人だったんですけども。当時まだ学生だった僕は、職業訓練学校の公告美術科にいたんですが、その時、JVCと同じ事務所にあったアフリカ日本協議会という団体ができてたんですけど、まだ設立間もなくで、しきりにシンポジウムを開催してたんですけど、僕は看板を作れるっていうんで何度か看板を作っていたのが、それをきっかけに、アフリカ日本協議会を通じて、そこで初めて栗ちゃんに紹介されて、それがきっかけでアフリカチームに参加しました。そんな経緯です。

中村：ありがとうございます。そこに至る歴史を感じま

すね。最後中川さん。お願いします。

中川：誰の心もつかんでいない私ですけども（笑）。私が入ったのは結構単純で、もともと国際協力の興味があってJVCのオリエンテーションに出たんですね。その時にボランティアチームというのがあるよと紹介されて、その時の司会が、今はやめた清水さんが当時ラオス担当だったので、ラオスチームに行ってみて、ボランティアチームの紹介みたいのがあって、アフリカチームもあるよと言われ、国際協力を知るにはアジアだけでなくアフリカだろうって。ラオスに行った次の週にアフリカチームに行った、こんな感じですよ。

中村：ありがとうございます。皆さんのお話の中でもちょくちょく出てきたオリエンテーションもそうですね、過去のイベントや合宿なんかもやっていたと伺ってますけど。

石川：そもそも合宿っていうのは親睦とアフリカを勉強する時間を持つという目的で開催されて、行った日はスタッフの話の聞いたりする時間があって、みんなでご飯作って食べて、夜通ししゃべって、翌日は遊びみたいな親睦とアフリカ勉強の二つを兼ねていたと思います。何回？
3、4回やった記憶がありますね。

中川：2回くらい参加しました。

今井：石川さん、3、4回くらいってどこ？伊豆に行ったの？

石川：なんか変な海岸べりに、ちょっと夜怖い話をしたような。

小河原：それは横須賀。

石川：そこ寿賀さん家と。

栗田：え？寿賀さん家？

石川：尾関さんの別荘と。

今井：私が入った年は秋川渓谷に行きました。

石川：私そこまで具体的な記憶は皆無。なんかリフトに乗ったとか、そんなだけ。

一同：あー。

中川：秋川渓谷って長瀬と一緒にですか？

今井：いや長瀬じゃない。秋川渓谷は檜原村だから。

中川：なんか原田さんがいた記憶があるんですよ。

今井：（原田さんがいたのは）もっと後だね。あと合宿って、あの小田急線の黒川に行ったことがあったな。あの時ね、朋ちゃんいたよね。

石川：もう、その名前は全然覚えていないです。

一同：笑

小河原：アフリカチームだけじゃなくてチーム全体でやった合宿もあるんで。荒井君って人が企画好きで、色んな場所を見つけてくれて。

中川：荒井君、その合宿で奥さん見つけて、それ以来合宿やなくなっちゃった。

石川：そうそう、目的達成したからね。

一同：笑

石川：でも全体的に若かったっていうのがありますよね。大学生とか20代の方が本当に多くて、やろう！って決めると、JVCもボランティアチームに自由に活動していいよってその関係する事業地のPRにつながったりとか、言ったらファンディングにつながったりとか、っていうのを目的にさえすれば、やることを細かく決められたりとかは全く無いので、本当にボランティアチームが、こうやりたいっていうのは結構自分たちで叶えてきた時代ですよ。

中川：まだ若かったんですよ。安倍ちゃんがいきましたね。

中村：若かったからという話がありましたけど、今、アフリカチーム年齢層が幅広いんですよ。50代から、それこそ下は巴山さんみたいな10代くらいの子まで各年代いるんですけど、昔は若い方が中心だったんですね。

小河原：学生が結構時間が作れて、なおかつ活発に動けるってことから、昔、中谷ちゃん、という人がいたんですけど、彼女も学生で、活発に色々やってくれたんですけどね。その人たちが結構やりたいことがある、って言ってグイグイ引っ張っていたのがあるかと思うんですよ。

その2に続く